

## 「映画 “National Treasure” とフリーメーソンの謎」

### 【独立宣言文書の裏面に隠された秘密の手掛り】

11月下旬に封切られたニコラス・ケイジ主演の映画 “National Treasure”はワシントンDCを舞台に始まる。しかし勿論米国財務省 (Treasury) の物語ではない。フリーメーソンが代々極秘に継承して来た「秘宝」を探す一種のロール・プレイング・ゲームである。主人公は、その名ベンジャミンフランクリンゲイツが示す通り、米国の由緒ある家柄の末裔であり、子供の時祖父から聞かされたフリーメーソンの謎と秘宝の探求に取り付かれる。長年の探求の結果、秘宝の隠し場所への手掛りが、なんと米国独立宣言文書(Declaration of Independence)の裏面に隠されているらしいと探し当てる。ところが、お宝探しに悪人が絡むのは毎度のこと、同様にそのことを知った悪人連中がワシントンDCのアーカイブ博物館から独立宣言文書を盗み出そうとする。それを防ごうとするドタバタのあげくに、主人公と相棒は自ら独立宣言文書を「盗み出して」しまう。アーカイブ博物館の美人担当官も巻き添えにして、警察と悪人連中の双方に追われながら、秘密の保管場所を捜し求める。独立宣言文書の裏に通常では見えない字で記載されていた手掛りは、更に次の手掛りに導き、こうして手掛りの連鎖を解きながら進むロール・プレイング・アクション映画が展開する訳である。

### 【フリーメーソンからテンプル騎士団の秘密へ】

これだけ言うと、ダン・ブラウンの最近のヒット小説 “The Da Vinci Code” と同種の展開だと思われるかもしれない。“The Da Vinci Code”は、パリのルーブル美術館でフリーメーソンのハイランクの会員だった博士が殺され、殺された博士が残した手掛りをつたって、博士の娘と巻き込まれた米人教授が、フリーメーソンが継承した中世のテンプル騎士団の秘密を探求するサスペンス小説である。あるいはウンベルト・エーコの小説「フーコーの振り子」を想起する方もいるかもしれない。テンプル騎士団にまつわる謎を探求してラビリンスに迷い込むような小説である。

この他にもテンプル騎士団の秘宝 (あるいはそれを継承したと言われるフリーメーソン) の謎を探求することをモチーフにした物語は古今沢山あり、この分野のマニヤや権威が我々一般人の想像を絶する「オタク・ワールド」を形成している。しかし小説や映画の形にする時一番難しいのは謎の結末である。上記の3作も謎の結末はみな異なり、そのことが全く違った含意を生み出している。それを語る前に、史実、あるいは学説として我々一般人にも確認できる範囲の基本的なことを整理しておこう。

### 【どこまでが史実か】

米国の独立と建国の父の多くが、フリーメーソンだったことは史実である。1778年の独立宣言に署名した人々にも、ウィリアム・フーバー、ベンジャミン・フランクリンなど多くのフリーメーソンが名を連ねている。フリーメーソンの起源については、見解が分かれており、フリーメーソンの史実は17世紀初頭までしか遡れないようである。しかし12世紀の初頭、十字軍運動の特に発足したテンプル騎士団の秘密をフリーメーソンは継承しているという根強い説がある。テンプル騎士団はフランスから来た騎士で構成され、十字軍に参加した、彼らはエルサレムを十字軍が奪還した時期に、紀元1世紀のヘロデ王の宮殿跡に宿営地を設け、秘密の発掘作業を行っていたと言う。その結果彼らが発掘したものが、

Templar騎士団の秘密として代々継承されるのだが、それが一体何であるかを巡ってこれまで「トンデモ論」から学術的仮説まで数多の説が提示されてきた。「ソロモン王の遺宝」、「聖杯」、「契約の聖櫃」など様々に推測、憶測されて来た。

Templar騎士団はエルサレムから帰還の後、会員を増やし、興隆した。ところが14世紀初頭に中央集権化に成功し絶大な権力を掌握したフランス王フィリップ4世に目を付けられる。フィリップ4世は、バチカンの教皇を毒殺し、傀儡教皇を擁し、ユダヤ人を集団追放し、その富を奪うなどやりたい放題に権力をふるった。当時Templar騎士団は莫大な財産を築いたジャック・ド・モレーをグランドマスターとして、欧州各地にメンバーを広げていたと言う。フィリップ4世は、異端の嫌疑でモレーを含むTemplar騎士団を集団逮捕し、拷問で異端の罪を認めさせ、ローマ教皇に騎士団の会員を破門させ、その財産を強奪する。こうして騎士団は滅亡するのだが、欧州各地の全ての会員が捕縛されたわけではなく、彼らは各地に落ち延びる。その一部はイギリスのスコットランド地方に落ち延び、そこで「ロスリンの礼拝堂」を建設し拠点とする。17世紀から史上に登場するフリーメーソンはこのロスリンの礼拝堂を拠点としたTemplar騎士団の末裔の活動に由来するという説が有力である。

### 【謎を巡る異なる3つの結末】

しかし結局現在までのところ、Templar騎士団がエルサレムの神殿跡の発掘で発見したものが何であったのか？本当に近代のフリーメーソンにそれが継承されているのか？ 仮説は様々にあっても、未知のままである。従って、小説家や映画製作者は自由に空想を躍らせて、それぞれのストーリーを展開できる。

小説“Da Vinci Code”では、Templar騎士団から継承されたフリーメーソンの「秘密」とは、実は生きながらえ、信者に守られて中世、近代に継承された「イエスの血族」だったと言う謎解きで結末する。その過程で、ローマカトリック教会がいかにキリストの原初の教えから乖離し、それを隠蔽するための数多の聖書改竄、史実隠蔽を行って来たかが説かれ、知的な興奮を掻き立てる。このカトリック教会批判には、今世紀半ば以降の考古学的な発見や文献学的な研究成果が反映されている。

ウンベルト・エーコの小説「フーコーの振り子」は、10年以上昔に読んだので、正確な筋立てを思い出せない。日本語訳で上下2巻の長編で、ストーリーを想起するために読み直すのも億劫なので結末だけ引用すると、こう言うことである。「懷疑は嘘を生み、その嘘を隠蔽するための秘密の記号が新たな秘密の記号を増殖して、嘘は永遠に言い古されることのない不老不死の秘薬となる。彼らは昔、二千年王国という妄想に取り憑かれ世界征服を実現するために作成された秘密の『計画』の存在を信じ、そのメッセージの断片を奪うために、秘密結社を組織しては、『贖罪の山羊』で血の儀式を際限なく繰り返して来た連中なのだ。」<sup>1</sup> 要するに「秘密は虚構で、虚構が永遠の秘密として一人歩きして来た」という結末である。こういうのを「ポストモダン風仕上げ」と言うのだろう。

さて、映画“National Treasure”の結末はどうか？ 主人公達が最後に辿り着くのはNYマンハッタンのダウントウンにある Trinity Church である。外装が真っ黒なこの異色の教会は、私にとっては懐かしい。20年前私が赴任して働いていた東京銀行NY支店のメインオフィスはブロードウエーを挟んでこの教会の対面（100 Broadway）にあったからだ。映画で主人公達はこの教会の地下に巨大な空間を発見し、その最深層部に秘宝の倉庫を見

<sup>1</sup> 「フーコーの振り子」ウンベルト・エーコ、藤村昌昭訳、文芸春秋、1993年3月初刷

つける。発見された秘法とは、古代エジプトに遡る文物、財宝の山である。映画の中で、その文物や財宝の内容や意味が何であるかは全く問題にされていない。とにかく莫大な「お宝」が発見されたのである。こうして主人公達は警察の嫌疑も晴れ、財宝を政府に譲って金持ちになり、悪漢どもは逮捕され、主人公はアーカイブ博物館の美人担当官と結ばれて、めでたし、めでたしのハッピーエンドとなる。

### 【謎の結末選好があなたのタイプを教えてくれる】

以上3通りの全く異なった結末を見たわけであるが、どの結末をあなたが好むかでタイプ分類ができる。“Da Vinci Code”がお好きな方は、「歴史的眞実追究」に知的な興奮を感じる批判派タイプであり、通説や権威に関する懐疑的なアプローチを好む。実は私もこのタイプに属している<sup>2</sup>。この小説は映画化されて2006年に封切りとなるそうである。

「フーコーの振り子」の結末がお好きならば、ポストモダン派タイプであり、「眞実の追究なんてダサくて、それ自体、時代遅れの信条」だと考える方である。あなたの知的な欲求は強いが、斜に構える性格のため、「眞実」という概念自体に強い懐疑心を抱く。

映画“National Treasure”がお気に入りであれば、あなたはハラハラ・ドキドキを感性的に楽しんで、最後ハッピーエンドで締めるのがベストだと考える娯楽派タイプである。こう言うては申し訳ないが、あなたの知的・批判的な欲求はほとんどゼロに近い。この映画の製作元はウォルト・ディズニーであることを言い添えておこう。お伽噺からも伝説からも、その批判性や危険性を一切毒抜きして提供する現代アメリカ娯楽文化最大の供給企業である。

以上

---

<sup>2</sup> 参考文献をズラズラ並べるのは好きではないのではないが、このテーマで関連文献をご希望の方は、お便り頂ければ、幾冊かご紹介致します。mtakenaka@btmna.com